

鈴木雅大：FICO2008 参加記

2008 年 8 月 25 日～29 日まで、ラテンアメリカ及びカリブ海域諸国藻類学会 (Phycology Society of Latin America and the Caribbean) の第 8 回国際大会と第 6 回イペロアメリカ藻類会議 (VI Ibero-American Phycological meeting) の合同大会 FICO2008 (Phycology のスペイン語訳 *Ficología* をもじったもの) がペルーの首都リマで開催された。中南米とカリブ海域諸国から約 100 名の参加者が集い、日本からは著者、韓国からは Tae Oh Cho 氏 (朝鮮大学校, 光州) の 2 名がアジア地域から参加した。日本からリマまでは、アメリカ合衆国ヒューストンで乗り継ぎ、行きは 21 時間、帰りは 26 時間という長旅であった。24 日の夜 11 時にホルヘ・チャベス空港に到着し、Cho 氏と共に Natalia Arakaki 氏 (ルイジアナ大学) の家に泊めて頂いた。大会組織委員会がホテルを手配してくれていたが、大会会場となるサン・マルコス大学へはタクシー以外に移動手段が無いため、スペイン語の話せない著者や Cho 氏には付き添いが必要だろうという Arakaki 氏の配慮であった。実際、リマの交通事情は隣国のチリから来た参加者が苦言を呈するほど悪く、タクシーは全て事前交渉のためスペイン語が分からないとどうして良いか分からない。英語の通用度はかなり低く、看板等もスペイン語のみでしか表記されないため、旅慣れた者でないと目的地に正確に着くのは難しいだろうと感じた。

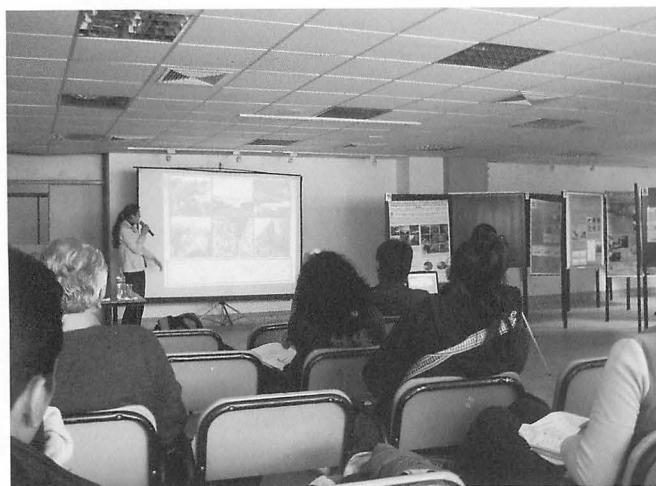
25 日の朝 8 時半に会場に着いてみると受付の準備が出来ておらず、開会式もそこそこに 1 時間遅れで発表が始まった。最初の休憩時間に入ってようやく受付が始まったものの、受付係が 1 人しかいなかったため、参加者が長蛇の列を成し、手続き中に次の発表が始まってしまった。ペルーで行われた大会にふさわしく、参加者全員にハンドメイドの手さげバッグが配られた。ペルー独特の模様が施され、軽くて使い勝手が良く、帰国後も使用している。発表はスライドも含めてほとんどがスペイン語とポルトガル語で、英語による発表は著者と Cho 氏の 2 件のみであった。著者は夕方にポスターセッションを行った。この大会のポスターセッションは変わっていて、演者はパネルの前に立つのではなく、口頭発表のようにスライドを使い、発表時間 10 分で順番に発表していくというものであった。スライドは、大会スタッフがデジタルカメラで撮影したポスター画像が用いられたのだが、低解像度で撮影しているらしく、演者の指示した場所を拡大するとぼやけて文字や図が見えなくなってしまった。発表後すぐにポスターははがされ、演者に返されるため、ポスターの前で活発に質疑応答が行われることは無かった。苦心して作ったポスターを遠くから、しかも 10 分間しか見てももらえないのは我慢ならず、大会組織委員の一人に「ポスターセッションの意味が無いだろう」と苦言を呈してしまった。そのためか、翌日のポスターセッションでは、演者はパネルの前に立ち、デジタルビデオカメラで撮った映像を実況中継する形に変更された。こちらの



集合写真 (FICO2008 大会組織の快諾による)

本意が伝わらなかったのは残念だが、演者の中には、ポスターのデジタルデータを大会スタッフに渡す者、ポスターとは別にパワーポイントを作ってきた者、ポスターを作らずにパワーポイントを作ってきた者など、この発表形式に対応している者もいた。おそらく、この不思議な発表形式には何らかの意味と背景があると思うのだが、Arakaki 氏らに尋ねたものの分からなかった。

27 日は、養殖施設見学ツアー、各種観光ツアーなどが企画され、著者は海藻採集ツアーに参加した。早朝 3 時発の長距離バスに乗ってリマを発ち、4 時間かけてピスコに移動、そこからタクシーで 1 時間かけてようやく目的地の海岸にたどり着いた。古いセダンに乗って、砂漠の真ん中をロードムービーさながらに突っ走った。町から大分離れた地点でエンジンがオーバーヒートし、車が止まった時は生きた心地がしなかった。皆で押すのだろうかと思っていたところ、運転手が飲んでいて清涼飲料水をおもむろに冷却タンクに注ぎ入れ、再びエンジンがかかった。嘘みたいに良く出来た話だが本当である。海岸は砂漠がそのまま海へ落ち込み、切り立った断崖となっていた。足場の不安定な崖を 10 m ほど降りてようやく磯に出られるのだが、採集品で一杯になったクーラーボックスを担いで登るのは骨が折れたし、参加者の一人が落石によって手に軽傷を負うなど、スリリングな採集行であった。チリからペルー沿岸は常時強い波が押し寄せるそうで、著者は太平洋の荒波には慣れているつもりだったが、波が打ち寄せる度に岩にしがみつかねばならなかった。二度と来られないかもしれないという思いから、参加者は皆、時間を忘れて採集に没頭し、激しい波にずぶ濡れになりながらも各々バケツや袋一杯に海藻を採集した。著者も 30 種類以上の海藻を採集、持ち帰ることが出来た。ピスコの海岸は、チリ沿岸から北上してくる寒流のペルー (フンボルト) 海流と、エクアドル沿岸から南下してくる暖流のエルニーニョ海流の両方の影響を受けているという。Macrocystis をはじめとして、40 cm を超える *Chondracanthus chamisoii*, *Prionitis decipiens*, *Rhodomenia flabellifolia* など大型の海藻が目立つものの決して単調ではなく、多種類の海藻が生育するお勧めの採集地であった。ただし上述の通り、採集地へは現地のガイドなしにたどり着



ポスターセッション風景（初日）

くことは難しく、採集にはペルー在住の海藻研究者の協力が不可欠である。

28日の夜は、ディナーパーティーが催された。ところが、開始10分前になって会場が変更になった。他の参加者達にとっても急な変更だったようで、全ての参加者が揃ったのは、ディナー開始から1時間以上経ってからであった。ディナーは、海辺のレストランで行われた。料理はビュッフェスタイルとなっていて、ペルーの様々な郷土料理を楽しめた。ステージではマリネラを始めとする伝統的な音楽と踊りが披露された。数々のパフォーマンスが終わった後は、参加者がステージに上がってのダンスパーティーとなった。独特のリズムに戸惑ったものの、ラテンの情熱を堪能させてもらった。翌日の発表を気にすることなく、パーティーは夜中の2時過ぎまで続いたのだった。

ツアー日を除いた4日間に渡って行われた発表は、口頭発表及び講演とポスターセッションとに分かれ、「分類」、「生態」、「生物多様性」、「養殖」、「バイオテクノロジー」の5つのテーマに沿って行われた。口頭発表65件、講演11件、ポスターセッション92件と盛況だった。海藻と微細藻とが同じ会場で行われることに不満の声もあったようだが、著者にとっては海藻と微細藻両方に興味があるため、会場を移動する必要がなくてありがたかった。微細藻は、珪藻、渦鞭毛藻、シアノバクテリアに偏る傾向があり、プロチストに関する発表は1件も無かったもののその他のテーマでは良くバランスが取れていた。特に日本では減少の一途をたどっている「分類」の発表数が他のテーマと変わらなかったことに驚いた。基礎から応用まで、それぞれの分野で若手が育っており、お互いの仕事への関心も高くとても居心地が良かった。また、中南米という地理的条件から、亜寒帯から亜熱帯まで、淡水域ではアンデス山脈の高山地域の微細藻類相についての発表もあり、多様な話を聴くことが出来た。中でも特に興味を引かれたのは、中南米とカリブ海域全体の海藻の分布についての発表であった。各国の海藻相の記載を基にアオサ藻（緑藻）、褐藻、紅藻それぞれの共通種を求め、各地域の共通性や植物地理を論じようというもので大変興味深い。しかし、残念ながら海藻相の記載が古い、分類学的に問題を抱えた種が多い、記載された種



パラカス国立保護区での採集ツアー

が少なすぎるなどの問題が多く、全体的な考察にはまだ早いという見解であった。著者は、形態分類と分子系統解析の両方が出来、専門とする分類群に偏らず海藻全般に造詣が深いとの過分な評価を受けたため、海藻相に関する共同研究を強く勧められた。特にチリとペルーの研究者達からは、北半球と南半球を含めた太平洋沿岸全域でのグローバルな研究を通し、各地域の海藻相の正確な把握が必要であると熱心に口説かれた。本大会に参加し、実際にペルーの海藻を観察して、いつか本格的に南アメリカ太平洋沿岸の海藻相の研究と日本の海藻との比較を試みたいと思うと共に、今後日本、韓国、ペルー、チリなどの国々の人々が互いに忌憚なく意見、情報交換が出来るよう役に立ちたいものと強く思った。

大会はとても充実したものであったので、批判的な事を言いたくはないのだが、大会組織委員会のルーズさには最初から最後まで振り回されっ放しであった。大会準備は大変逼迫していたようで、プログラムは大会前夜まで届かず、参加者の多くは会場に着くまで発表スケジュールが分からなかった。要旨集に至っては25日の夕方ようやく会場に届いた。また、そもそもプログラムはあっても無いようなもので、毎日1時間遅れが当たり前、発表順も頻繁に入れ替わり、ポスターセッションに至っては5件に1件が演者不在で発表時間も守られなかった。もう一つ気になったのは、参加者のマナーの悪さである。発表中に携帯電話の着信音が何度も鳴り響き、中には電話に出てそのまま話し続ける者までいた。また、ほぼ全ての発表でデジタルカメラによる撮影が行われていた。パワーポイントをむやみに撮影するのは控えるべきだと思う。次回は3年後にアルゼンチンで開催されるという。ポスターセッションの在り方と合わせて、少しでも改善されることを強く願っている。

最後に、採集ツアーの写真を送って下さったCho氏、集合写真の掲載を快諾して下さいました大会組織委員長 César Córdova Castañeda氏（サン・マルコス大学）、スペイン語の分からない著者を常に気遣い、サポートして下さいました Arakaki氏に感謝の意を表します。

（東邦大学大学院理学研究科）